

高松城水攻め前後のおかやま



高松城跡

羽柴秀吉陣地跡

水攻築堤跡

ももっち・うらっちと
一緒にたずねてみよう



岡山県マスコット
ももっち・うらっち



岡山県内では、天下を左右する大きな合戦が幾度かありました。平安時代末期の源氏と平氏との戦い（源平合戦）では、源（木曾）義仲が敗退し平氏が勢力を盛り返すことになった、1183年（寿永2年）の水島合戦、また翌年に源範頼軍が平行盛軍を破った藤戸合戦がありました。南北朝の動乱では、九州に下った足利尊氏の弟直義が新田義貞配下の大井田氏経を破り、その後の湊川の戦いの勝利につながるようになった、1336年（建武3年）の福山合戦がありました。

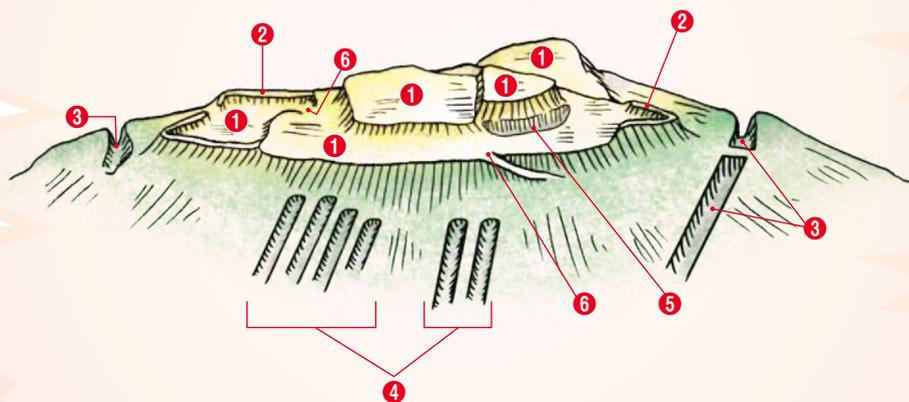
そして、1582年（天正10年）にあったのが、中国地方の大半を支配していた毛利輝元の軍と織田信長の配下羽柴（のちの豊臣）秀吉の軍が戦った、高松城水攻めです。この戦いは、秀吉による天下統一の第一歩ともいえるものでした。1576年、信長は秀吉に岡山地域を含む中国攻略を命じ、翌年10月に秀吉は播磨に軍を進めました。播磨三木城（現在の兵庫県）の城主別所長治の離反、摂津有岡城（現在の兵庫県）の城主荒木村重の謀反などがありましたが、1580年5月ごろにはようやく播磨を平定できました。

一方岡山地域では、織田有利と見なした岡山城主宇喜多直家が毛利を離れ織田につくことを決意し、1579年（天正7年）10月信長に服することが許されました。これにより岡山地域の勢力図は大きく変化し、県内各地で織田方の宇喜多軍と毛利軍との戦いが本格化しました。また、1581年10月には因幡（現在の鳥取県）の毛利方の拠点であった鳥取城が落城し、11月には淡路（現在の兵庫県）が平定され、翌年3月ついに秀吉は播磨・但馬（現在の兵庫県）・因幡三国の兵を率い、毛利の前線である備中に入りました。毛利軍は、高松城をはじめ宮路山城・冠山城・加茂城・日幡城などに備中の武将と自らの配下の武将を入れ、羽柴軍・宇喜多軍を待ち受けていました。羽柴軍・宇喜多軍は宮路山城・冠山城を落城させ、そして4月27日には高松城攻略に入りますが、撃退されました。そこで採用されたのが水攻めの戦法です。作戦通り高松城の周囲は水で満たされ、戦いは羽柴軍有利に展開し、水面下で和平交渉が進みました。そんな中、6月2日に信長が京都の本能寺において明智光秀によって討たれたとの報が、秀吉のもとに伝わります。毛利方と早期に講和を結んだ秀吉は、いわゆる「中国大返し」で東に引き返し、山崎の戦いで明智光秀を破り、信長の後継者として名乗りをあげました。このように、毛利との早期講和も含め高松城水攻めは、秀吉にとって大きな転換点となった戦いでもありました。

このガイドブックでは、高松城水攻めだけではなく、その前後の毛利対織田の戦いの様子を伝える岡山県内の旧跡の一部を紹介しています。それではこのガイドブックを片手に、戦国時代の岡山を散策してみてください。（※年月日の表記は、太陰暦に基づいています。）

中世の城

鎌倉時代から戦国時代の中世と呼ばれる時代の城跡には、建物はもちろん石垣があることもほとんどありません。このため、訪れてみても普通の山にしか見えず、がっかりするのではないかと思います。しかし、じっくりと観察すると、自然の地形としては不自然な、平らな場所、盛り上がった場所、へこんだ場所などがあちこちにあたりします。実はこれが中世の土で築かれた城の痕跡なのです。一見ただのこぼこも、この時代の戦法、武器の変化に応じて、いろいろな工夫がなされた結果なのです。それでは、このガイドブックで使われている城に関する用語を説明します。



- 1 曲輪 (郭) : 敵の攻撃を防ぐために設けられた平らな場所。守備兵が駐留します。
- 2 土塁 : 土を盛り上げて作られた、敵の攻撃を防ぐための施設。
- 3 堀切 : 敵兵の進入を防ぐため、山や丘陵の尾根を断ち切った堀。
- 4 豎堀 : 城の周囲の斜面に、城に対して垂直に掘られた堀。敵兵による斜面の横移動を防ぐ役割などがあります。連続して設けられた豎堀を畝状豎堀群と呼びます。
- 5 横堀 : 城の周囲を囲むように掘られた堀。
- 6 虎口 : 城の出入り口。

やま なか しかの すけ はか

山中鹿介墓

〈高梁市落合町阿部 高梁市指定史跡〉



山中鹿介幸盛は、出雲の富田城（現在の島根県にあり、月山富田城、富田月山城ともいいます）の城主であった尼子氏の家臣で、1566年（永禄9年）尼子氏が毛利元就に降参、没落すると、京都にいた一族の尼子勝久を迎え尼子氏再興をめざしました。1577年（天正5年）に織田信長の支援を得て、播磨の上月城（現在の兵庫県）に立てこもりましたが、毛利軍に包囲され、翌年落城しました。山中鹿介は捕らえられ、のちに備中国阿井（合）の渡して殺害されました。

写真の供養塔は、1713年（正徳3年）に当時の松山藩主石川総慶の家臣によって、山中鹿介が殺害された場所付近に建立されたものです。

周辺略図

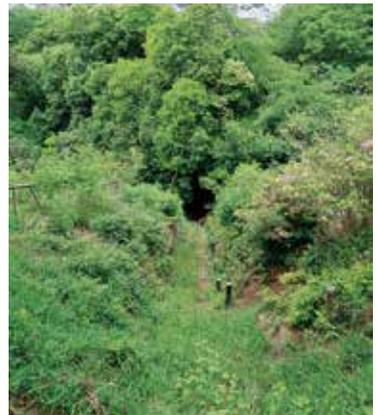


す さいじょうあと 周匝城跡

〈赤磐市周匝・草生 一部が周匝茶臼山城跡として赤磐市指定史跡〉



吉井川と吉野川の合流点近くに、城の櫓の形をした展望台のある山があります。この山は茶臼山と呼ばれ、曲輪、堀切、塹堀などがよく残っている城跡です。また茶臼山の北西の大仙山にも城跡があります。曲輪・土塁・堀切・塹堀・横堀などの防御施設をたくみに組み合わせて造られており、岡山県内の石垣を用いない城としては、最も発達した築城術によって造られた城の一つです。両方の山にまたがる城は、周匝城と呼ばれていたようで、織田信長に従おうとしていた宇喜多直家に対抗するため、毛利方の支援の下で整備されたとする説もあります。江戸時代に作られた『備前軍記』などの物語には、1579年（天正7年）2月に宇喜多直家の軍勢によって落城したと記されています。



周匝城跡の塹堀

周辺略図



はちはまがっせん こせんじょう
八浜合戦の古戦場
 〈玉野市八浜町大崎ほか〉



児島郡西部を支配下においていた毛利軍と織田信長についた宇喜多軍とが、現在の玉野市八浜町八浜から玉野市八浜町大崎の周辺で戦いました。八浜城（両児山城）を拠点にしていた宇喜多忠家・元家（基家と記される場合もあります）率いる宇喜多軍は、毛利軍の拠点麦飯山城の麓まで進出し激しい戦いとなりました。この戦いで宇喜多軍は、宇喜多元家が戦死するなどし

古戦場にある石造物

ました。この合戦があったのは、高松城水攻めの直前の1582年（天正10年）2月21日と現在は考えられています。

なお宇喜多軍の拠点であった八浜城跡の一部は、現在公園として整備されていますが、岡山県ではめずらしい100mを超える横堀と連続する塹壕との組み合わせを見ることができます。



八浜城跡の横堀

合戦の時期については、1581年（天正9年）2月、同年8月とする説などがあります。



周辺略図



よ た ろ う さ ま 与太郎様

〈玉野市八浜町八浜〉



八浜合戦で戦死した宇喜多元家（基家と記される場合もあります）を祭った神社で、足の病に効験があるとされています。宇喜多元家は、岡山城主宇喜多直家の甥で、1579年（天正7年）直家が織田信長に従うことを許された際には、その代理として織田信忠（信長の子）に謝礼を述べています。1582年（天正10年）2月21日の八浜合戦では宇喜多忠家とともに宇喜多軍を率いていましたが、流れ弾に当たり戦死したと伝えられています。

なお、現在の瀬戸内市邑久町豊原にある大賀島寺には、宇喜多元家が戦死したときに着用していたと伝えられる甲冑が残されています（県指定重要文化財。岡山県立博物館で展示されることがあります）。

周辺略図



宇喜多元家の甲冑
（大賀島寺所蔵。写真は岡山県立博物館提供）

たかまつじょうあと
高松城跡

〈岡山市北区高松 国指定史跡〉



高松城跡を上空から見た写真です。
曲輪の様子がうかがえます。



清水宗治の胴塚と伝えられる石造物

有名な水攻めの舞台となった高松城のあとは、現在、その一部が公園として整備され、資料館も開館しています。

高松城水攻めについて、江戸時代に作られた物語などからみると次のようです。毛利方の対決のため出陣した織田信長配下の羽柴秀吉は、高松城の北に陣を構えました。高松城には、城主清水宗治やその兄清



高松城跡内にある清水宗治首塚

水月清をはじめ、備中国内で毛利方に属していた中島大炊助らの武将、そして毛利輝元の叔父小早川隆景から派遣された末近左衛門尉らが籠城していました。高松城周辺の城を攻め落とした羽柴軍は、4月27日に高松城を攻撃しましたが、戦死者数百人を出して撃退されました。そこで秀吉は、堤防を造り足守川の水を引き入れ、城を水没させる戦法を採用しました。梅雨の時期でもあり水かさは増していきました。毛利輝元の叔父吉川元春と小早川隆景は、5月21日に高松城南方の岩崎山（庚申山）・日差山などに陣を置き、また猿掛城（現在の矢掛町・倉敷市にあります）には、毛利輝元が出陣しました。しかし、すでに孤立していた高松城を救援することはできず、織田方の援軍来訪の報せもあり講和を決意しました。そして、城内にいる兵の助命などを条件に、6月4日清水宗治・清水月清らが切腹し開城となりました。

高松城は、平野内にある高まりを曲輪に利用し、その周囲には自然の沼地や堀をめぐらし、敵兵の侵入を防いでいました。高松城内部の施設についての当時の記録はほとんどなく、大手に「櫓」があるほか、籠城に備えて「木屋」（兵の宿泊施設）を急いで建てたという記録しかありません。現在の地形から4つの曲輪があったと考えられています。そのうち本丸と呼ばれている曲輪には、1910年（明治43年）に石井山から移された清水宗治の首塚があり、その北西の民家の間には胴塚と伝えられる石造物もあります。

このほか、高松城跡周辺には、清水宗治が切腹したとされる場所、船に板を渡して城内への出入りに利用していたとされる船橋など、高松城水攻めにゆかりのある場所があります。



もうり さかいめ 毛利方の境目の城をめぐる

清水宗治の子孫の家で作られた記録には、1582年(天正10年)1月下旬ごろ、毛利方の小早川隆景が織田方について宇喜多氏の領地との境を守る7カ所の城主を三原(現在の広島県三原市)に呼び、作戦の相談をしたと伝えられています。7カ所の城の名前ははっきりしません。しかし江戸時代に作られた記録によると、毛利方は高松城・加茂城・日幡城・庭瀬城・松島城・冠山城・宮路山城・岩崎城などを織田方に対する拠点としていたようです。

そのうち、ここでは3つの城を紹介します。まず、岡山市北区下足守にある冠山城跡です。この城には、林三郎左衛門・鳥越左兵衛らが籠城したと伝えられています。羽柴軍は何度かこの城を攻めましたが、失敗しました。しかし城中で火災が発生したため、ついに落城したと記録されています。冠山城は、小さな丘陵全体に築かれ、頂上部の曲輪とその下に階段状の曲輪が設けられています。また西側斜面には、連続して豎堀が掘られているのも大きな特徴です。

次に、岡山市北区加茂にある加茂城跡です。この城には、上山兵庫介元忠・生石中務少輔と毛利から城に入った桂民部大輔広繁らが籠城していました。しかし、城兵の一部が羽柴方に味方したため、城の一部を宇喜多軍に奪われましたが、ついに撃退したと伝えられています。加茂城



冠山城跡



加茂城跡

跡（一部が加茂城二ノ丸跡として岡山市指定重要文化財）は、高松城跡と立地のよく似た平城です。江戸時代の記録には3つの曲輪があったと記されていますが、現在その様子を想像することは難しくなっています。

最後に庭瀬城跡（岡山市北区庭瀬）ですが、江戸時代に作られた記録には、毛利から派遣された井上豊後守有景らが籠城していたと記されています。この庭瀬城のあったと思われる場所は、江戸時代の大名・戸川氏などの居城として改修されています。また、現在庭瀬城跡となっている場所の西方に、高さ4～5メートルの石垣が残された撫川城跡（岡山市北区撫川、岡山県指定史跡）がありますが、高松城水攻め以後の時代に造られた遺構で、もともと庭瀬城と一体の城として整備されたと考えられています。



庭瀬城跡



みず ぜめ ちく てい あと

水攻築堤跡

〈岡山市北区立田 国指定史跡 附〉



はしばひでよし
羽柴秀吉は、高松城を水攻めするために堤を築きました。江戸時代に作られた物語などの記述から、高さ約7m、基底部の幅約21m、長さ約3kmの堤防を12日間で完成させた、とされています。しかし現在は、大規模な堤防を全体に造ったのではなく、自然の高まりを利用しながら堤防を作り、水をせき止めたと考えられています。

現在、岡山市北区立田の蛙ヶ鼻には、このとき築かれた堤防の一部と思われる高まりが残されています。岡山市教育委員会が蛙ヶ鼻の築堤跡周辺を調査した際、堤の基底に入れた俵のあとや木杭などが確認され、現地で見ることができます。



堤の基底部



たかまつじょうみず ぜ なるたにがわ い せき
高松城水攻め 鳴谷川遺跡

〈岡山市北区長野 県指定史跡〉



1582年（天正10年）の高松城水攻めには、足守川のせき止めだけではなく、城の背後の峠を切り開いて水路を作り、龍王山の裏を流れる鳴谷川をせき止めて、その水を利用しようと計画されました。峠を切り開く工事は、全長約410mにも及び、峠を最大約9m掘り下げるものでした。完成前に高松城は開城となり、工事を担当した奉行は責任を取って切腹したとされ、遺跡の近くには奉行のものと思われる墓があります。

現地には、鳴谷川をせき止めるために動かした石が転がっており、なかには石を割るために打ちこんだ鑿のあとがある石もあります。



水奉行の墓



高松城跡周辺にある陣城跡をめぐる

じんじろあと

陣城は、戦場で造られた臨時の城のことです。高松城水攻めの際にも、たくさん
の陣城が造られています。羽柴秀吉は、
1582年（天正10年）4月に高松城の北
方にある龍王山（岡山市北区長野ほか）
に陣を置き、同5月の高松城水攻めのこ
ろには、高松城の東方にある石井山（岡
山市北区立田）に陣を移したと伝えられ
ています。石井山には尾根を削って平ら
にした曲輪などが残されています。また、
高松城主清水宗治の首を埋めていた首塚
のあとなどもあります。

一方、高松城を包囲された毛利方は、
5月21日に吉川元春が岩崎山（庚申山、
岡山市北区新庄上ほか）、小早川隆景が
日差山（倉敷市矢部ほか）に陣を置いた
とされています。庚申山には、当時積善
寺という寺院があったと伝えられ、現在
も後に建てられた帝釈天や毘沙門天など
を祭るお堂があります。頂上部などの平
らな場所が陣地に利用されたと考えられ
ます。日差山も日差寺と呼ばれた寺院が
あり、その境内などが陣地になったと考
えられます。

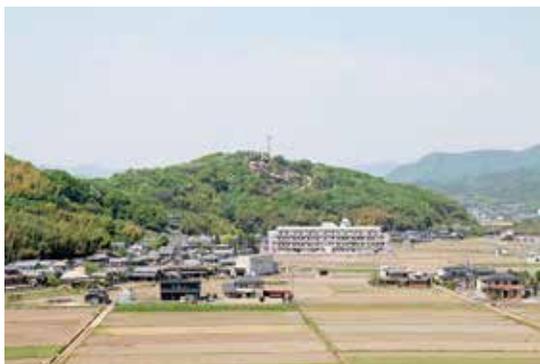
このほか、岡山県最大の古墳である造
山古墳（岡山市北区新庄下、国指定史跡）
も、毛利方の陣地に使用されました。「古
墳が陣地に？」と思われるかもしれませ
んが、県内でも、美和山古墳群1号墳（津
山市二宮、国指定史跡）などは中世に城



石井山から見た高松城跡



石井山のある清水宗治首塚跡の碑



庚申山

として利用されています。造山古墳では後円部を主に陣城として利用したと考えられ、曲輪と思われる平地や、頂上部には土塁や横堀が残るなどとしています。



日差山



造山古墳後円部に残る土塁



いわやじょうあと 岩屋城跡

〈津山市中北上 県指定史跡〉



岩屋城跡の畝状竪堀群

岩屋城跡は、岩屋山（標高約483m）の山頂を中心に、東西約600m、南北約700mに及んでいます。現在も曲輪をはじめ、堀切や連続して設けられた竪堀（畝状竪堀群）などが残されており、美作地域を代表する山城跡の一つとなっています。

高松城開城後、羽柴秀吉と毛利輝元との間の交渉により、美作国は宇喜多秀家の領地となり、岩屋城は宇喜多方への引き渡しを求められました。しかし、当時の岩屋城主中村頼宗はこれを拒否しました。このため、1584年（天正12年）3月、宇喜多秀家は岩屋城を攻撃しましたが、落城させることはできませんでした。結局、同年7月、和睦によって明け渡されることになりました。岩屋城跡周囲の尾根上には、岩屋城攻めに際して宇喜多軍が築いたと考えられる小規模な陣城のあとや土塁などが残っています。



岩屋城跡周辺の陣城跡

周辺略図



当時の資料を読んでみよう

1 ^{はしばひでよし}羽柴秀吉書状（総社宮所蔵、岡山市指定重要文化財）



【読み】

尚以、なわの事は、式百束之分
早々馳走可為

先度繩之事

祝着候、已上、

申遣候処、早速

馳走候而、相越

令祝着候、此表

儀、すくも塚の城

乗崩、一人も不残

討果候、并かわやの

城水之手迄責

詰、昨日落居候、

同昨日かもの城

端城乗破、悉令

放火候、然は何之

城成共可取巻候ハ、

繩之事は式百束

馳走候て相越候は、

可為祝着候、為其中

遣候、謹言、

五月三日 秀吉（花押）

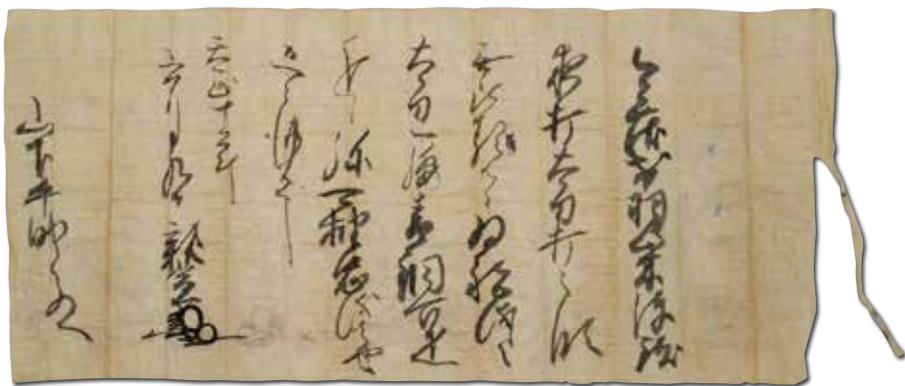
児島之内

郡年寄中

【解説】

羽柴秀吉が、^{こじまぐんごり}児島郡郡（現在の岡山市南区郡）の^{としより}年寄（村役人のこと）にあてた手紙です。秀吉は、郡から送られた繩の礼を述べるとともに、さらに200束の繩を早く送るよう命じています。また、「すくも塚の城」、「かわやの城」、「かもの城」（^{かぶりやま}冠山城、^{みやじやま}宮路山城、^{かち}加茂城のことを指していると考えられます）を次々に攻略したことも伝えてあります。江戸時代の物語には高松城水攻めは5月7日ごろから始まったと記されており、郡から送られた繩もその包囲のため使われたと思われる。

2 みむらちかのぶかんじょう 三村親宣感状（岡山県立博物館所蔵）



【読み】

今度、於羽柴陣致

夜打・太刀打之段

無比類候、為祝儀之

太刀一腰、青銅百疋

進候、弥可抽忠儀者也、

恐々謹言、

天正十年

六月九日 親宣(花押)

山下牛助殿

【解説】

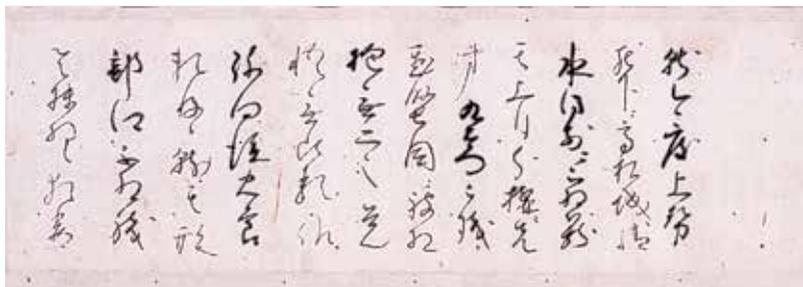
高松城開城後の6月9日に、三村親宣から山下牛助に渡された感状です。高松城に入り、羽柴軍と戦い手柄をたてた褒美として、太刀1腰と青銅100疋（一文銭1,000枚にあたりと考えられます）を与えることが記されています。

三村親宣は、現在の高梁市成羽町下原にあった鶴首城の城主で、毛利方の武将として1600年（慶長5年）の関ヶ原の戦いまで各地で戦いました。また、山下牛助は、三村親宣に従って戦っており、1582年（天正10年）の八浜合戦（5頁参照）で、鉄砲により負傷したことも分かっています。（写真は岡山県立博物館提供）

感状とは、合戦での活躍などを褒められて主君から与えられる文書のことです。



3 こばやかわたかかけ
小早川隆景書状（正宗文庫所蔵）



【読み】

就今度上勢
罷下二、高松城へ清
水同前二被為籠
其上自分構二兄
弟九右衛門被残
置、堅固二被相
抱、無二之覚
悟無比類候、
弥向後忠節
頼存候、就其形
部郷不相残
令扶持候、猶委
細鶴飼新右衛門
可申候、恐々謹言、
小早川
八月十三日 隆景（花押）
中島大炊助殿

【解説】

高松城開城の約2ヶ月後、毛利家を支えた武将である小早川隆景が、「中島大炊助」（正しくは大炊助）にあてた書状です。文中の「上勢」は羽柴秀吉率いる織田軍、「清水」は清水宗治のことです。中島大炊助は清水宗治とともに高松城に入り、自らの本拠の城は、兄弟の九右衛門に守らせていたことが記されています。また小早川隆景は、中島大炊助の高松城での活躍に対して、「形部郷」（正しくは刑部郷で、現在の総社市刑部付近）を残らず与えると伝えています。

所在マップ



- 発行日 平成26年8月11日
- 発行 岡山県教育委員会
- 編集 岡山県教育庁文化財課
〒700-8570 岡山市北区内山下2-4-6
電話086-226-7601 (直通)
- 協力 大賀島寺、岡山県立記録資料館、岡山県立博物館、岡山市教育委員会、
総社宮 (岡山市北区郡)、正宗文庫
岡山県古代吉備文化財センター、岡山県立岡山城東高等学校、
岡山市立岡山中央小学校、岡山市立芳泉中学校